

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日 運輸省特許局特許第...七号
明治三十一年十月十一日 第三種郵便物認可(毎月一刷) 百五号
平成二十年十二月一日 発行 第四百一十一卷 第十七号

ホトトギス

十一月号



俳句随想 〔三百十七〕

汀子

日本を九ブロックに分けて年間各地でホトトギス大会が開催される。県単位で会を開くことになる。主宰がお伺い出来ない会が出来てくるだろうから、九ブロックに分けて、ブロックの中で県の当番を持回りにすることになり、年尾主宰の頃から今なお延々と続いている。既に四十回近く会を重ねている所もある。この仕組みが始まったばかりの頃、中心になってお世話下さった方々もすっかり世代交代となり、それがスムーズに運んだ所はいいが、うまく世代交代が出来なかった県もある。そんな県ではどうしても活動が停滞する。当番として世話をしないばかりではない。その県のホトトギス俳人はブロック大会に出席しにくくなるのである。しかし今年はその問題解消のため、その県で他県の指導者が中心になって声を掛け、これまで出席出来なかったその県のホトトギス俳人も堂々と出席して下さった。「俳句の交わりは風雅の交わりである」ということをその方々にお話し出来たことが大きな収穫となった。

毎年歳を重ねるということを心に留め、若い世代への継承をスムーズに実行する心の寛容を育てて行きたいと思っている。

旬日記 汀子

平成十九年十一月三日 関西ホトギス同人会

道迷ふことも紅葉の九十九折
快晴の比叡のやや寒なりしこと
秋深山路に染まりゆくところ
湖見えて紅葉の色の加はりぬ

十一月四日 関西ホトギス俳句大会

こんなに星ありし山寒くとも
暁蘭の孤高ならざる月と星
峰寺のなほ深きへと紅葉濃し
末枯のしとど濡れたる山路かな
山暮れて家居の冬となりけり
気づきたるとき初時雨なりしか
彩りに末枯色の加はりぬ

十一月吉日 祝「松の花」

祝ぎごころ抱きて越の秋惜む
河内野に爽やかな風起りけり

十一月八日 漣交社

凧に六甲の晴極まりぬ
快晴の茶の花日和つづかねど
短日や仕事残してならざりし
まだ先と思ひぬしこと冬に入る
山深く茶の花垣をめぐらし
凧のいつかしづまりをりしこと
短日の時間やりくりせしも旅

十一月九日 工業倶楽部

又一つ増えし予定や冬日和
紅葉散る日表散らめ日裏かな

十一月十日 関西野分會

吹き抜ける風の存間干大根
冬日和約せしごとく旅の地図
大根の干し上りたる湖日和

十一月十日 下萌句会

初冬の雲の低さを諾へり
初冬の家居の晴の勿体なし

十一月十三日 大俱楽部

炬開の薪揃へ置く山荘に
この空のどこか虹置く初時雨
冬紅葉には散る心残さるよ
くし紅けづりたき糸菊の大ききよ

十一月十三日 綿業倶楽部

神無月 神の集る方へ旅
これよりこの旅路を思ふ神無月
落葉掃くことは尽す日待つことに

十一月十五日 角川「俳句」正月用

一句集 緋く年の始かな
知らざりしとは知るまでの人の冬
炬に寄ればそこは生るる山の音
析落葉音又一つ追うて来し
峰寺の音なき冬の星仰ぐ

十一月十七日 中国ホトギス同人会鳥取

又一つ忘れし朝の来てをりぬ
忙しくなると初夢より覚むる
見てならぬ紅葉黄葉に運転す
時雨雲全く失せて日本海
今宵泊つ冬の星空期待して

十一月十八日 中国ホトギス俳句大会

懸案の句碑訪ひ得たる小六月
峽紅葉語ることばのなかりけり
雪雲に太陽蔵しゐるところ
見えてある冬の星座の一部分

十一月十九日 アサヒカルチャー

時雨虹旅の家の華やぎに
帰りたるあとに雪来しことも旅

十一月二十日 有恒倶楽部

風や庭を黄色に染め上げし
極めるといふは峽路の冬紅葉
一雨の洗ひし帰路の冬紅葉

十一月二十日 無名会

帰り花いつも見つけし辺りかな
人も又日向によるべ帰りの花
凧の中飛ぶものも散るものも
凧の去りに残りし木々の色
時雨虹全容見えぬこともよし
運転の力一歩遅れてわが旅路
森深く来て抜ける空帰り花

十一月二十一日 夏潮句会

短日の心づもりの出来るまで
旅し来し紅葉のつぎある家居
短日に従ふ旅路ありけり
風の出で落葉はじまる庭となる
又一人黄葉に染まり来られけり
神の旅一歩遅れてわが旅路

十一月二十一日 きんぎょ会

枯葉とは思へぬ色を残しをり
又今日も枯葉積むまま掃かず
ともかくも手順を整理日短
枯葉なほ風の存間ある大地

十一月二十一日 時雨句会

凧に飛ばされさうに身構へし
大根の端端しさを千切に
ともかくも大根焚いて置くこと
一日は小春の旅となりしこと
凧と思ふビル風とも思ふ

十一月二十四日 句会と講演の会

北国の寒さは置いて来られけり
会場の明るきことも小六月
新海苔と炊きたて御飯あれば足る

十一月二十五日 たつの市民俳句大会

日に透けて紅葉に空の色加ふ
一と色でなかりしことが紅葉山
見頃とは色を尽くさぬ紅葉にも
湖の風そこは抜け道大根干す
器量よし器量悪しきと大根干す

十一月二十九日 野分會

廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年十一月一日 蕉心会

秋惜む江戸下町の片隅に

大川の流れ行秋乗せてゆく

新蕎麦に長蛇の列の交差点

秋燕帰る気の無き飛翔かな

蕉像のやうな顔して秋惜む

海へ行く水街へ行く水澄めり

紅萩の簪めける角度かな

秋時雨雲の明るき辺りより

瓢の実を活けて供花てふ落着きに

十一月三日 関西ホトギス同人会、大会

時雨雲呼び込んである雨男

身に入むや千二百年消えぬ灯に

濃紅葉に日色さ走る速さかな

冷やかに星は交響曲奏で

極楽に一番近き堂小春

行秋を刻む時香の煙かな

十一月六日 刈谷市民俳句大会

淡々とあはあはと秋薔薇かな

しつとりと三河時雨でありにけり

神の旅似ても似つかぬ我の旅

十一月七日 一水会

穂田や日出づる国の掌

三河路の空白々と初時雨

十一月八日 土筆会

鷹舞うて噴煙少し揺らしけり

冬めきし車窓に富士の茫とあり

虚子の父修行せし山鷹渡る

鈍色に鐘楼古りて冬めきぬ

十一月十二日 朝日カルチャー若草句会

石路の黄を未だ明かさぬ忌日寺

石路の黄に明日を信じる女かな

初時雨余呉は昔を語らざる

十一月十五日 登高会

北窓を塞ぎ浅間と別れけり

単に竹百幹の秀の揃ふ

終の香と電飾のある家並

北窓を塞ぎボジョレー解禁日

終の咲きて待降節迎へ

十一月十七日、十八日 中国ホトギス同人会、大会

筆跡は永遠に虚子句碑小春

短日の飛機より低き日差かな

小春日や砂の一粒一粒に

冬うらら駱駝嫌がつてるやんか

鴨の陣日本一の池に、と

時雨雲風の存問ありにけり

松葉蟹今日が底値といふ活気

耀声の暗号めきし寒さかな

十一月二十日 草木瓜会

句座といふ冬暖かき緑かな

冬ぬくし砂丘に人の沈みゆく

冬ぬくしカレー屋今日も人集め

柀の花の香こを曲るまで

三沢川羽搏くものに冬ぬくし

十一月二十二日 徳源寺句会

いうゑんちえうちゑん児に枯葉舞ふ

枯葉舞ふとは八分の六拍子

十一月二十四日 ホトギス社句会

新海苔に飯微笑んでをりにけり

新海苔や星の雫を浴びし艶

十一月二十五日 日本伝統俳句協会の若草句会と講演の会

参道を目覚めさせたる冬紅葉

新しき山門小春乗せてをり

抜きん出て黄葉散り初む一樹かな

山門を染め上げてゆく冬日かな

十一月二十七日 若水句会鎌倉吟行会

大仏の嚏しさうな鼻と口

冬紅葉虚子散歩せしこの辺り

虚子の軸部屋の要や冬灯

新蕎麦を吸り句心郷心

冬うらら虚子が今にも出て来さう

十一月二十八日 目黒学園句会

冬構丸ビル色を増やしゆく

大根に、と突き立てる串の艶

冬構白き悪魔を待つ静寂

大根煮る匂ひ三軒先にまで

小六月砂丘は人を拒まざる

散髪といふ冬構ありにけり

雑詠

廣太郎 選

国道の左右あぢさゐ色築き 熱海 嶋田摩耶子
 夕燕散步の犬の増えてきし 同
 ぶらんこを並んで漕いで仲直り 同
 蘇る 虚子 明易の 稽古会 長岡 安原 葉
 虚子偲びあふ面々の涼しさよ 同
 虚子在すと語らるる涼しさよ 同
 硯屏の堆朱でありし夏書かな 名張 勝村透石
 座右に置く闘病日記夏書とす 同
 一病の心静かに夏書かな 同
 二三軒若布干しある舟屋かな 福知山 大槻右城
 霞濃し海なき如く海のあり 同
 若布干しごくおだやかな午後の浦 同
 薫風を耳にうけつゝ古寺の苑 たつの 浅井青陽子
 紫陽花の大小白く古屋敷 同
 薫風のさ中に建つか新句碑は 同
 月下美人今宵は咲くと誘はれて 福岡 松尾緑富
 月下美人一と風呂浴びて見に行くと 同
 月下美人咲き始めたときかかり 同

甘樫の丘の夏草風騒ぐ 樫原 稲岡 長
 葛城の神飛び越えしはた神 同
 鬱々と夾竹桃の紅咲けり 同
 兵庫県より京都府へ蝸牛 八尾 岩垣子鹿
 郭公の森へ迷子となりに行く 同
 夏断など出来ぬ凡夫で通しけり 同
 短夜の余生消えゆく時とあり 福山 竹下陶子
 夜の薔薇にキヤンドル千個銀河なす 同
 花菖蒲咲き文学の立ち上る 同
 富士を見る駐車あぢさゐ咲いてぬし 熱海 嶋田一步
 富士を見てをりしが蟻を見ることに 同
 今日富士の見えざるところ雲の峰 同
 礼節の涼しき距離を崩さざる 香川 湯川 雅
 やつと振り向いてくれたる汗の顔 同
 水を打ち直してみてもまだ来ない 同
 少年の日へ種飛ばすさくらんぼ 龍ヶ崎 今橋眞理子
 滝音が人を寡黙にしてをりぬ 同
 万緑の底に水音浴びてをり 同
 四葩色得つつ工事は進みつつ 神戸 山田弘子
 居候らしく草取などもして 同
 曾良の謎芭蕉の謎に明易し 同
 でで虫の時間速いかゆつくりか 同
 全身で聞く熊蜂の翅音かな 同
 あめんぼや己が水の輪に山河在り 同
 同 長山あや

雑詠句評（十月号より）

弘子・比奈夫・しげ人
暮潮・くに彦・昭代
純也・雅・一步
仁義・廣太郎

明易や近代俳句その夜明 榎原 稲岡 長

来年は高濱虚子没後五十年という大きな節目を迎える。虚子記念文学館では平成二十一年三月六日より四月十九日まで、横浜市の近代文学館で、企画展「近代俳句の夜明け」の開催が予定され、その中心となって準備を進めておられるのが作者である。

俳句は、正岡子規の俳句革新により新しい時代を迎えたが、その時代の広がりとお興行き、そして今日の吾らに繋がる歴史を識る展示とは胸躍る思いがする。

「明易」は短い夏夜が忽ち白んで朝を迎える情感を伝えた季題であるが、夜を朝に継いでその企画に精魂傾ける作者の姿を想像すると共に、下五「その夜明」とも響き合っている。

「明易」といえば虚子の代表句の一つ「明易や花鳥諷詠南無阿弥陀」にも繋がり、この季題の持つ膨らみの大きさを感じずにはいられない。

多くを何ら語らないこの一句から、並々ならぬ作者の気概が伝わると共に、季題の力というものを改めて知らされた思いである。

（弘子）

虚子記念文学館で以前「近代俳句の夜明け」と題する展示がおこなわれていた時期がある。虚子以前の、いわゆる俳句革新運動までの近代俳句の黎明期である。作者はその展示の中心になられた方で、あらためて俳句の歴史を実感されたのである。季題がその心持ちを雄弁に語っている。（廣太郎）

虚子五十回忌欠かさず来て卒寿 榎原 木村 享史

虚子先生の五十回忌を迎えた。振り返ってみると自分はお詣りを一度も欠かしたことがない。お陰で今年自分は九十歳を超えることが出来たという。先生に肖つての自祝の句。（比奈夫）

平成二十年四月八日は虚子の五十回忌であった。当然の如く菩提寺の鎌倉寿福寺へは例年になく、大勢の参会者がいらつしやつた。勿論作者もそのお一人であり、それだけではなく、虚子忌は欠かさずお出でになっておられる。年月の重みと、作者の虚子を慕う気持が見て取れる。（廣太郎）

天地有情

花子選

土佐水木黄蝶の濃きをたたせけり 福知山 大槻右城
初花の次の便りに間のありて 同
川といふ卯月の蛇行ありにけり 東京 稲畑廣太郎
輝きは空との対話柿若葉 同
花合歡の道はるばると来し三瓶 長岡 安原 葉
木天蓼の群生も待ちくれし山 同
士用浪高しはるか海思ふ 樞原 稲岡 長
鳥一羽水にたはむれ梅雨明くる 同
清々と梅雨の明けたる野道行く 福岡 松尾緑富
梅雨明けし生垣のいと匂やかに 同
放たれて吾も亦風となる夏野 宝塚 水田むつみ
たたなはるとは合歡の花合歡の花 同
父を恋ふ石見の海や鯖火燃ゆ 浜田 田中静龍
夏めきし浜田魚臭の濃き町に 同
夏草に呑み込まれたる芦屋川 大阪 佐土井智津子
甚平着て伊賀のひと夜となりにけり 同
牡丹の溺るる雨の止まぬなり 相模原 木村享史
手の届くところにも古茶の缶 同

遙かなる夏の記憶を持ち集ふ 東京 今井千鶴子
紅い金魚白い金魚や金魚草 同
草引きし手の匂ひけり夜の頁 大阪 塙 告冬
夕蟬の幹に触れば手にきこゆ 同
花菖蒲垂れて耳順といふことば 熊本 岩岡中正
花菖蒲むらさき匂帖まくれなぬ 同
柿の花落ちてころげて女坂 東京 橋本くに彦
風迷ふほどにはあらず青芒 同
蠅虎さへも味方につけたき日 神戸 山田弘子
若竹のこのしなやかな勁さ欲し 同
激しかりしカラヤンの楽行々子 徳島 上崎暮潮
見廻してみて我一人青芒 同
虹立つや白寿の句碑の今除幕 たつの 浅井青陽子
水亭を詠まんと来たり薫風に 同
山法師皓々と咲き深山めき 豊中 瀧 青佳
勇と艶失すべからず老涼し 同
影が来て影が出て行く夏木立 八尾 岩垣子鹿
島裏へ回りにて卯浪どんと打つ 同

天地有情句評

汀子

土用浪高しはるか海思ふ 榎原 稲岡 長

土用浪から思い起こした遥の海への郷愁。

梅雨明けし生垣のいと匂やかに 福岡 松尾 緑富

長雨の季節が終つて茂つた生垣が匂う。

放たれて吾も亦風となる夏野 宝塚 水田 むつみ

広い夏の野に踏み込んだ作者と風の関係。

父を恋ふ石見の海や鯖火燃ゆ 浜田 田中 静龍

石見の海に燃える鯖火と父上への想い。

夏草に呑み込まれたる芦屋川 大阪 佐土井 智津子

まるで夏草に呑み込まれたと見た芦屋川の情景。

初花の次の便りに間のありて 福知山 大槻 右城

初花の次の便りを待てず身罷られし作者を悼みて余りある。

輝きは空との対話 柿若葉 東京 稲畑 廣太郎

柿若葉の輝きを空との対話と見る感性。

花合歓の道はるばると来し三瓶 長岡 安原 葉

遙か三瓶山を目指す途上の合歓の花に誘われていく心。

(以下略)